HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	中学生の仲間集団間の社会的地位と学校適応における関連性の検討 ： 「スクールカースト」という現象に注目して［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	水野, 君平
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	甲第13777号
Issue Date	2019-09-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/75789
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Kumpei_Mizuno_abstract.pdf, 論文内容の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（教育学）　　氏名：水野　君平

学位論文題名
「中学生の仲間集団間の社会的地位と学校適応における関連性の検討」
―「スクールカースト」という現象に注目して―

本論文は「スクールカースト」と呼ばれる生徒のインフォーマル集団間の地位格差に着目し，これと生徒の学校適応の関連性を検討したものである。具体的には 7 つの質問紙調査による実証的研究を通して「スクールカースト」の基礎的検討,「スクールカースト」と学校適応の関連性やメカニズムを明らかにした。

第 1 章では「スクールカースト」と呼ばれる学級内でのインフォーマル・グループ間の地位格差が生徒の学校生活に与える影響を解明するべく，国内外の仲間関係研究をレビューし，これらとの差異を取り上げながら，測定手法を含めてどのように研究を進めるべきかという提案を行った。その結果，自己報告によって所属グループの集団間地位とグループ内での個人間地位を同時に測定する方法を提案した。これによって,「スクールカースト」が扱う所属グループの地位格差を反映しつつ，学級差などへの分析上の応用が可能であり，なおかつ簡便に測定することが可能であるという利点があることを挙げた。

第 2 章では先行研究の課題点として「スクールカースト」研究の少なさ，仲間関係研究としての「スクールカースト」の位置づけの必要性,「スクールカースト」を通した学校適応研究の再考する必要性を挙げた。続いてそれら課題点に対応する本研究における 3 つの目的と，本研究の全体的な目的である，学校適応との関連を通して「スクールカースト」という新たな仲間集団関係の問題を明らかにするという目的を提示した。

第 3 章では「スクールカースト」についての実態把握として，大学生・専門学校生を対象にして質問紙調査で検討した（研究 2)。その結果，青年は「スクールカースト」を広く認知していることが明らかとなった。また，中学生の頃のグループや集団間の格差関係に対する態度に拘わらず,「スクールカースト」を否定的に捉える一方で，中学生の頃に高地位グループにいた青年や集団間の格差関係に対して肯定的な態度をもつ青年は低地位グループに属するような人物に対して否定的な印象をもつことも明らかとなった。すなわち一部の青年は,「スクールカースト」という階層構造自体を否定的に捉えておきながら，その一方で，その中で低地位になり得る人物に対しても否定的になるというダブルスタンダードな態度を持つことが示唆された。

第 4 章では「スクールカースト」と中学生の社会的適応の関連を検討した。社会的適応の指標としていじめ被害・加害を取り上げた（研究 3, 研究 4)。単純に所属グループの地位といじめの関連を検討した研究 3 では，所属グループの地位はいじめ加害とは関連せず，いじめ被害の項目とは一部関連していたが，その関連の程度はかなり小さいものであった。この

ことから，所属グループの地位によって生徒の社会的適応は大きく変わらない可能性が示唆された。続いて研究 4 では研究 3 の調査手法を改善し，所属グループの地位と，深刻ないじめの被害・加害，およびいじめ被害時の行動に着目し，中学生を対象とする質問紙調査から検討した。分析の結果，所属グループの地位の低さは週 1 回以上のいじめ被害と関連していること，いじめ被害時に相手にやり返しができないこと，いじめ被害が解決しにくいことと関連している事が明らかとなった。このことから，所属グループの地位はいじめ加害という深刻な社会的不適応に関連していることは見いだせなかったが，いじめ被害とその深刻さの一因となってしまう可能性が示唆されただろう。研究 3 と研究 4 で所属グループの地位といじめ被害の関連性について結果が一貫していなかったが，調査地域や調査年が大きく変わらないことから，回答方法のワーディングや集計方法の違いが考えられる。また，研究 4 は研究 3 の課題点を改善した研究であるため，研究 4 の結果の方が妥当性は高いものと考えられる。

第 5 章では「スクールカースト」と中学生の心理的適応の関連を検討した。心理的適応の指標としては学校適応感を取り上げた（研究 5, 研究 6)。研究 5 では，2 個のデータセット（研究 6 と研究 7 のデータセット）を用いて計 4 つの指標をメタ分析で統合することにより所属グループの地位と学校適応感の関連を検討した。その結果，一貫して所属グループの地位と学校適応感の間には正の関連が見られ，「スクールカースト」は生徒の心理的な学校適応に対して関係しており，高地位グループの生徒ほど学校適応感が高く，低地位グループの生徒ほど学校適応感が低いことが明らかとなった。そして研究 6 では所属グループの地位と学校適応感の関連について社会的支配理論を用いて中学生を対象とする質問紙調査から心理的メカニズムを検討した。その結果，所属グループの地位に高い生徒ほど，集団間格差を是認しやすく，その結果として心理的適応を高めることが明らかとなった。

第 6 章では「スクールカースト」と中学生の適応の関連について，心理的適応に焦点を当て，どのような要因によって所属グループの地位と学校適応感の関連が弱まるのかということを検討した（研究 7, 研究 8)。研究 7 では学級間の差に着目し，46 学級の中学生を対象とする質問紙調査から検討した。その結果，学級のあり方によっては，所属グループの地位で学校への充実感が大きく変わらない可能性が明らかとなった。続いて研究 8 では生徒個人の学校生活の在り方に着目し，研究 7 と同様の質問紙調査から検討した。その結果，学級外での知り合いの多さは所属グループの地位と学校への居心地の関連を弱め，「スクールカースト」による心理的な不適応を緩衝できることが明らかとなった。

第 7 章では上記の研究結果を纏め，これまでの研究に対する意義を議論した。具体的にはこれまで中学生に対して十分に実証的知見が蓄積されてこなかった「スクールカースト」研究，国内外の仲間関係研究との差異と「スクールカースト」の独自性，学校適応―特に心理的適応に対して「スクールカースト」は影響する一方で，条件によっては影響しない可能性があること，そして，「スクールカースト」という視点から学校適応を検討することで学校に適応する際に出てくる「適応の負の側面」を議論した。最後に，本研究の知見から得られる教育実践への示唆と本研究の限界点および展望を議論した。